

令和８年度 第１回地域日本語教育とうきょう推進会議
議事要旨

令和８年７月３０日（木）

都庁第一本庁舎北塔４２階特別会議室Ｄ及びオンライン

午前 10 時 00 分開会

○事務局 それでは、定刻となりましたので、令和 8 年度第 1 回地域日本語教育とうきょう推進会議を開催いたしたいと思います。

本日は、お忙しい中、御出席をいただきまして誠にありがとうございます。

本委員会の事務局を務めます東京都生活文化局多文化共生推進担当課長の横田と申します。座長が選出されるまでの間、私が事務局としまして進行役を務めさせていただきます。

本日は、対面とオンラインのハイブリッド開催とさせていただきます。

オンラインで御参加の委員は、カメラは常時オンでお願いいたします。また、御発言いただく際、画面に表示されている手のひらのアイコン、手を挙げるボタンを押してお知らせください。名前が呼ばれましたら、御自身の名前をおっしゃってから、御発言いただきますようお願いいたします。

会場にお越しにいただいている委員におかれましても、御発言いただく際に、挙手でお知らせをいただきまして、同様に名前が呼ばれましたら、御自身の名前をおっしゃってから、御発言いただきますようお願いいたします。

なお、傍聴の皆様においては、マイク・カメラをオフにして御参加いただきますようお願いいたします。

続きまして、東京都の事務局の紹介、また、今季、委員の改選がございましたので、委員の皆様を御紹介いたします。

まず、都民活躍支援担当部長の久松です。

○事務局（久松） 久松です。よろしくお願いいたします。

○事務局 改めまして、私、多文化共生推進担当課長、横田でございます。よろしくお願いいたします。

統括課長代理の井元でございます。

○事務局（井元） 井元です。本日はよろしくお願いいたします。

○事務局 また、本日は東京都つながり創生財団からも御出席をいただいております。

次に、委員の皆様を御紹介いたします。

お手元の資料 1、本会議の委員名簿に記載の順番に御紹介をさせていただきます。

では、まず株式会社 One Terrace 取締役、阿久津委員でございます。

○阿久津委員 どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局 ありがとうございます。

では、続きまして、インターカルト日本語学校学校長、一般財団法人日本語教育振興協会理事長、加藤委員です。

○加藤委員 加藤です。よろしくお願いいたします。

○事務局 ありがとうございました。

続きまして、武蔵野大学グローバル学部教授、神吉委員です。

○神吉委員 神吉です。よろしくお願いいたします。

○事務局 ありがとうございました。

続きまして、せたがや国際交流センター地域日本語教育コーディネーター、亀井委員です。

○亀井委員 亀井です。よろしくお願いいたします。

○事務局 ありがとうございました。

続きまして、北区地域振興部国際交流・多文化共生推進担当課長、佐藤委員です。

○佐藤委員 佐藤と申します。よろしくお願いいたします。

○事務局 ありがとうございました。

続きまして、CE HUMAN RESOURCES 株式会社代表取締役、シュレスタ委員です。

○シュレスタ委員 シュレスタです。よろしくお願いいたします。

○事務局 ありがとうございました。

続きまして、本日オンラインから御参加のウェブデザイナー・教材制作者であります角南委員です。

○角南委員 よろしくお願ひします。

○事務局 ありがとうございました。

続きまして、NHK国際放送ラジオジャパン、ビルマ語アナウンサー、チョウチョウソー委員です。

○チョウチョウソー委員 チョウチョウソーです。よろしくお願いいたします。

○事務局 ありがとうございました。

続きまして、一般財団法人町田市文化・国際交流財団町田国際交流センター、センター長、富田委員です。

○富田委員 富田です。よろしくお願いいたします。

○事務局 ありがとうございました。

続きまして、明治学院大学教養教育センター准教授、長谷部委員です。

○長谷部委員 長谷部でございます。よろしくお願いいたします。

○事務局 ありがとうございます。

続きまして、東京日本語ボランティア・ネットワーク副代表、山形委員です。

○山形委員 山形です。よろしくお願いいたします。

○事務局 ありがとうございます。

以上、本日の会議の出席者は11名、欠席者は0名でございます。

次に、座長選出を行いたいと思います。地域日本語教育とうきょう推進会議設置要綱第5の規定で「推進会議に座長及び副座長を置き、委員の互選により定める。」となっております。どなたか推薦のある方はいらっしゃいますでしょうか。

○長谷部委員 それでは、本会議の立ち上げの当初から座長を歴任されてこられまして、御意見も御実績もありになる神吉委員にお願いしたいと思うのですけれども、いかがでございますでしょうか。

○事務局 皆様、よろしいでしょうか。

では、神吉委員、座長をお願いできますでしょうか。

○神吉委員 はい、ありがとうございます。

○事務局 ありがとうございます。

それでは、神吉委員に地域日本語教育とうきょう推進会議の座長をお願いいたします。以降の進行は神吉座長にお願いしたいと存じます。神吉座長どうぞよろしくお願いいたします。

○神吉座長 改めまして神吉です。よろしくお願いいたします。

また座長を務めさせていただくということで、しっかりと議論ができるようにやってまいりたいと思いますので、御協力よろしくお願いいたします。

そうしますと、副座長の選任を今から行いたいと思いますが、加藤委員を推薦させていただきたいと思っております。日本語学校の学校長も務めていらっしゃいますし、現在、日本語教育振興協会の理事長も務めていらっしゃいます。日本語教育に様々な観点から関わりを持っていらっしゃいますし、教師養成、また地域の多文化共生の取組を、日本語教育の観点からも進めていらっしゃいます。そういったことで、加藤委員を推薦させていただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

(了承)

○加藤委員 よろしく申し上げます。

○神吉座長 ありがとうございます。

それでは、副座長は加藤委員にお願いするということで今年度進めたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

続いて、本委員会は設置要綱第6の3に基づき原則公開とされておりますので、公開で進めさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

(了承)

ありがとうございます。

それでは、本日の議事録等の取扱いについて、事務局から御説明をお願いいたします。

○事務局 ただいま、会議を公開するということが決まりましたので、議事録は氏名入りでホームページに後日公表いたします。

事前に事務局で作成した議事録案につきまして、発言者の皆様に確認をさせていただき、最終的な確認は、座長に御一任とさせていただければと存じます。

なお、個人情報に係る事項等がある場合には、座長と相談して対応したいと存じます。

また、8月17日に開催予定でございます東京都多文化共生推進委員会の中で、本日いただく御意見を暫定版としてお示しをいたしたく、こちらは座長の御一任の下、進めさせていただきたく存じます。

以上でございます。

○神吉座長 ありがとうございます。

それでは早速、本日の議題を含む資料説明を事務局からお願いいたします。

○事務局 ありがとうございます。

では、本日の議題等について、資料3に沿って御説明をさせていただきます。

2ページ目を御覧ください。まずこちらの目次に沿いまして、御説明を進めていきたいと思っております。

3ページ目から6ページ目につきましては前回会議の振り返りにつき、時間の都合上、割愛をさせていただきます。

7ページ目を御覧ください。まず課題認識といたしまして、初期日本語レベルの外国人への日本語教育の対応が不十分な場合です、将来的に様々な社会的リスクが顕在化していくおそれがあり、対応は急務と考えております。

次に、その初期日本語レベル層の状況ですが、都内の在住外国人数は増加傾向にある中、初期日本語レベルの外国人と推計している約11万人に対して、就労、生活領域で様々な主体が学習機会の提供を担っているという状況でございます。

その中でも、主な対応主体であります区市主催の初期日本語レベルを対象とした日本語教室は需要に対して不足しており、10 万人超の初期日本語レベルの外国人に十分な学習機会を提供できていない状況にあると推察をしているところでございます。

こうした状況を受けまして、自学習の仕組みと自走を支援する、新たな学習環境の整備が必要であると考えております。

そうした課題認識の下、今年度、都内の日本語学習の実態を把握するために外国人 500 人へのアンケート調査、区市等へのヒアリング調査を実施しましたので、その結果の概要と、そこから得られる課題や施策の方向性について御説明をいたします。

まず、外国人 500 人へのアンケート調査につきまして、こちら都内在住外国人 500 人のうち国籍が都内における割合上位 10 か国、留学生を除く 18 歳以上、A2 レベル以下の方を対象にアンケート調査を行いました。

その結果、日本語学習ニーズは高いものの、仕事や家事といった忙しさであるとか、学習環境の不足等の理由から学べていないという層に対して、自身に合う学び方、継続しやすい学習形態、学んだ日本語を実際に使う機会の提供が必要といった示唆が得られました。

次に、区市や国際交流協会、日本語教育関係機関にヒアリングを行いまして、外国人に初期日本語教育を提供する際のポイントであるとか、課題等を調査いたしました。

その結果、初期日本語レベルの学習者の課題というものが学習の各プロセスであります日本語習得の必要性の気づき、学習機会の認知、学習開始の準備、学習の開始、そして学習の継続のそれぞれで発生する障壁の積み重ねにあるという示唆が得られました。

これらの示唆から導かれる初期日本語レベルの学習者が抱える課題といたしまして、まず学習意欲や学習コンテンツの不足といったものではなく、各プロセス上に課題が存在しているということ、具体的には、プロセスの順に、①学習に関する情報が届かない、②自分に合う学習機会、方法を見つけられない、③学習開始のハードルが高い、④学習初期段階でつまづきやすい、⑤継続を支える仕組みの不足といった点が挙げられました。

そうした課題を踏まえました施策の方向性といたしまして、まず学習の入り口のプロセスとして、①学習意欲が低い層にも情報が届く仕組みの整備、②個々の状況に応じた学習機会・方法の提供、③学習開始までの動線確保の支援が重要といった方向性が得られました。

次に、学習の継続支援に当たるプロセスという面から④学習への不安、抵抗感の解消、実践期間や達成度の可視化など、学習意欲を維持できる仕組みの整備が重要という方向性が得られました。

こうした方向性を踏まえまして、学習の入り口、継続などをカバーする包括的な学習環境を整備していくことの重要性を認識したところでございますが、それに当たりましては国で現在検討を進めています日本語・生活学習プログラムの役割分担を図っていくという必要がございますため、次に国の検討状況についてお示しをいたします。

国は今年1月に策定した総合的対応策の中で、日本語や制度、ルール等を学習するプログラムの創設に関して検討の方向性を示したところです。

今年7月には、その検討状況が示され、国は学習プログラムの受講状況の在留審査への反映であるとか、地方公共団体との連携などについて検討していく旨が示されました。

また学習プログラムは社会インフラになり得るとして、実施可能なところから運用を開始していく旨なども示されたところでございます。この国の検討状況を踏まえまして、国と都の役割分担をイメージしたものが次のページでございます。

国は全国共通の学習基盤として学習プログラムを整備するということを受け、都としては国のプログラムを活用し国が示す地方公共団体の役割、地域の実態に即した学習機会の提供に対応していくという考えの下、日本語学習の入り口から継続、また学んだ日本語を生かして地域社会への接続を支える環境というものを、DXの活用であるとか、留学生などの既存リソースも活用しながら整備していくということを考えてございます。

その整備内容をイメージしたものがこちらの図でございます。円の中央に国の日本語学習プログラム、こちらをコア機能として設置しまして、都としては、そのプログラムを活用した学習が広く普及、進んでいきますように①学習の入り口整備として学習を動機づける機能、②継続の促進策としての自己学習を支援する機能、③社会とのつながりを創出し社会接続を支援する機能、これらを備えたポータルサイトというものを新設していきたいと考えております。また福祉や企業等の各主体と連携しまして、このポータルサイトの活用を広く周知していければと考えます。

改めてとなりますが、都といたしましては、国が責任を持って用意するとされている学習コンテンツの学習が進みますよう、その周辺環境を整備していければと考える次第です。

ここからは各機能として考え得るものを、あくまで構想段階の例示としまして幅広にお示しをしております。まず学習の入り口につながるための機能の例といたしまして、母語による日本語学習案内でありますとか、インセンティブの付与、学習者同士で情報交換できるようなコミュニティの形成など、学習の入り口、関心を後押しするような機能をポータルサイト上に実装していければと考えます。

次に②学習の継続を支援するための機能の例です。まず、人が介在した伴走支援といたしまして、国プログラム、オンラインでの自学習を継続してもらうに当たっては、やはり要所での人の介在が重要であるということが調査結果から得られたというところを踏まえまして、例えば人を介在して、オンライン、ビデオチャット、あるいは対面による支援機能を設けて、継続を後押ししていければと考えます。

そのための支援者人材の養成も、併せて行っていければと考えます。またほかにも、個別最適化された学習プランの提供でありますとか、学習進捗の管理機能など、学習意欲を維持できるような機能を実装していければと考えます。

最後に③地域社会との接続を促すための機能の例といたしまして、地域活動や交流イベントの情報を個人にひもづけて考えていくような推薦機能、地域ボランティアなどの活用を案内する機能、就労やキャリア支援に役立つような情報発信機能をポータルサイト上に実装していければと考えます。

次にスケジュール案について、こちらまだ案段階でございますが、令和8年度の調査、構想の結果を受けて、令和9年度からポータルサイトの構築・試行、令和10年度から本格的な稼働に移っていければと考える次第です。

ここまでの内容を踏まえまして、本日の議題となりますが、初期日本語レベルの在住外国人に着実に学習機会を提供し、充実した生活が営める日本語能力（B1相当）の習得や、地域社会との接続を促すための環境整備に向けまして、次の点について御議論いただければと存じます。

国の生活・日本語学習プログラムとの役割分担や、令和8年度調査の結果に基づき今後、都が行う環境整備の取組に備えるべき機能といたしまして、（１）学習の入り口につなげるための周知方法や実装すべき機能、（２）学習の継続を促すための機能、（３）地域社会との接続を促すための機能、これらにつきまして、フリーディスカッションにより御議論いただければと存じます。

事務局からの説明は以上でございます。

○神吉座長 御説明ありがとうございました。

昨年度からというか、前回から課題として情報提供、それから情報周知徹底、それから認知というところですね。そういうところが課題になっており、そこから学習に、また社会参加につなげていける仕組みができればいいのではないかとということで今回、整理したものを御提案いただきました。

今日のこの議題の三つですね。一つ目が学習の入り口につなげるための周知方法や機能ということで、これが資料でいうと、主に 23 ページに書いてあるものです。それから二つ目が、学習の継続を支援するための機能ということで、24 ページにあるもの。それから地域社会との接続を促すための機能ということで、25 ページにございます。それぞれの観点から委員の皆様のお意見、忌憚のない御意見、どういう方向からでも構いませんのでいただければと思っております。一つずつの議論に 30 分ほどかけたいなと思っておりますので、よろしくお願いします。

では、まず一つ目、学習の入り口につなげるための周知方法や機能について、いかがでしょうか。御意見のある方は挙手をお願いいたします。

ありがとうございます。長谷部委員、お願いいたします。

○長谷部委員 明治学院大学の長谷部と申します。よろしくお願いいたします。

すみません。まず一番最初の学習の入り口につなげるための機能ということなので、ずっと今日のお話を聞いて考えていたのですが、今、国のほうで、永住申請をする際に日本語の要件が厳しくなるということがもう目に見えて分かっているということがあるので、最初の日本語が勉強できる機会をすこし強制力を強化、人間の自由に対してあまりいいことではないですが、強制力を強化する必要がある、もしかするとあるのかなと思っていて。なぜこのようなことを思ったかという、御存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、私、インドシナ難民という方々の研究をしていて、あの方々は入ってすぐにセンターに入ると、日本語と就労支援というものをパックでやるという仕組みで、国がきちんと難民として受け入れたということだったので、そこを国が保障するということがあったのです。それが日本語を充実させるために十分かどうかということはまだ議論は置いておいて、ある程度強制的に日本語を勉強していた期間があった、ということまで考えると、ふと、やりたい人だけやったらいいのですよ、というふわっとしたものよりも、区市町村のほうに、日本語を勉強するための機会というのがありますよというのを、入管にも協力してもらって情報発信をするぐらいのことが。強制力がない限り、日本語の入り口に着く人ってそんなに多いかなと。それはチョウチョウソー委員やシュレスタ委員にきちんとお伺いしたほうがいいと思うのですが、それぐらいの強制力がない限り、日本語を勉強しないのではないかと。

別にその人たちが悪いという意味ではなく、やはり機会がない、生活が大変ということがまず先に来ると、最初の日本語レベルが上がるまでというのは、学習するときも相当しっかりやったほうがいい。入り口も強制力がある程度働いたほうがいいのかな。ふんわりした日

本語学習案内ですとか、ポイントを上げますとかいうことよりも、強制力があつたほうがいいのかでは。そこに強制力があつた後、母語による日本語の案内とか、コミュニティの形成支援とかというのがあつたほうがいいのか。東京都ができることを超えているかもしれませんが、それがもしできないのであれば、東京都に住む人はこうやったほうがいいのか、条例ができるかどうかは難しいですけど、法律的に厳しい何かがあつたほうがいいのか。と思ひました。すみません。できるかどうかは今全く関係なくしゃべっています。

○神吉座長 ありがとうございます。しょっぱなから、なかなかいい議論が入ってきたと思います。一昨年度でしたか、似たような話を少し長谷部委員と、ここでした記憶があります。以前は学習の権利というのはあるけれども、それは決して義務化するものではないのではないかと考えていたけれども、やはり今の在住外国人の様子を見ていて、もっとしっかり日本語を勉強してもらうということ自体が、その人たちの社会参加にも、またよい権利を使っていくということでも重要ではないかと考えていますということをおっしゃってくれたと思います。その延長の御意見と、今、伺いました。

チョウチョウソー委員、お願いします。

○チョウチョウソー委員 チョウチョウソーと申します。

先ほど、長谷部先生が言うとおりの、僕もそういう考え方があるのですよ。次の議論のつながりがインセンティブ、それは必須だと思います。もう一つは、今、国の制度で、外国人がたくさん増えて、その人たちが日本語を話せる、日本語が理解できるならば、日本の社会につながりやすい。僕は最初来たときに日本語は全く分からない。でも、自分で勉強して学んでいろいろな活動し、それで日本語を話せるという自信ができたとき、日本人たちとつながりができる。だから、僕ら外国人の気持ちは同じだと思いますよ。話せないです、から話せるようになったら距離がもっと縮まる。そういう機会を、環境をつくること。

それから、もう一つは情報です。今、国の制度で、日本語をもっと勉強できるように、話せるように、分かるようにしていくということで、そういう環境をつくることも必要だと思いますよ。だから外国人たち、今、10万人、11万人を対象とする人たちに、日本語を勉強できるよ、日本語が学習できることがたくさんありますよということを発信するという、そういう情報を日本語だけではなくて、コミュニティのキーパーソンとか、コミュニティのリーダーにできるだけ発信する。コミュニティリーダーを通してがいいかなと僕は思います。

取りあえず以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。コミュニティリーダーを介してという話でしたけれ

ども、どうですか、ミャンマー、それからネパール、中国、そのコミュニティリーダーからの情報提供というのは、有効というところはあるですか、実際、事例として。いかがでしょうか。

シュレスタ委員、お願いいたします。

○シュレスタ委員 CE HUMAN RESOURCES のシュレスタです。

長谷部委員の強制力というところに私も賛成です。あとはコミュニティリーダーからの情報発信ということは、もちろんですね。そのコミュニティとのつながりがありますので、コミュニティもいろいろなコミュニティが出来上がっていて、リーダーたちは、その各コミュニティに情報発信するための努力をしてもらうのは有効的だと思います。

もう一つは、私が前からずっと言っているのは、コミュニティの中の情報発信媒体ですね。エスニックメディアとか新聞とか、オンラインメディアとかいろいろありますので、それを通しての情報発信が有効的だと思います。

そして、集まりのときですね。集まりが非常に多いです。特にネパール人の場合は、もう毎週ぐらいにどこかで 100 人、200 人単位で集まっている場合があるのですね。そういうところを利用されたほうが絶対いいと思います。最近は警察の方々とか、消防署の方々にそういうところに出ていただいて、情報発信していただいているのも見かけていますので、ぜひ日本語の場合も、そういうところも利用されたほうがいいのではないかなと思います。

ありがとうございます。以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。今、シュレスタ委員が 100 人ぐらいの集まりが頻繁にあるということですが、逆に、そのコミュニティがしっかりしているから、日本語が要らないのではないかと考える人たちが出てこないでしょうか。その辺りはいかがですか。

○シュレスタ委員 そうですね。その辺はちょっと危険で、もちろんコミュニティ内だけの活動だったら、日本語は要らない。場合によって最近はアルバイト先とか、仕事先でも先輩が教えてくれるから言葉なしで済んでいるところもありますけれども、やはり私たちが、日本語を教えるとか、勉強してほしいという目的は、いざとなったときとか、災害のときとかですね。そういうときのためにです。そのときはいつも誰か一緒にいるというわけではないので、そういう危険性を教えながら、日本語は大事だよということを教えながら、日本語を勧めるのがいいかと思います。

以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。コミュニティリーダーに伝えるだけではなくて、コミ

ユニティリーダーと協力して、必要性を訴えていくというのが重要なことだと思います。

もう一点、今のコミュニティ関係で、もし皆さん、御意見があれば、お聞かせいただきたいのですが、移住してきた一世の方に対する日本語教育と、それから、その子供たち、二世に対するものというのは、少し方向性が違うというか、やるべきことも、また重要性も、また変わってくると思うのですが、その辺り現状、または委員の皆さんで何か御意見とか、問題意識等ございますでしょうか。

長谷部委員、お願いします。

○長谷部委員 度々すみません、長谷部でございます。

当然のことながら全然違って、一世は一世のばらつきがあると言ったら大変失礼ですけれども、シュレスタ委員とかチョウチョウソー委員のように、ご自身がものすごく勉強して、日本人のコミュニティに入ってこられる方というのはいると思うのですが、やはり一世の方は基本的に、やはり、多分今ここで議論している、届かなくて日本語ができないという方のほうが多分圧倒的に多いはずなので、初期の日本語って話になると思うのですが、第二世代の子たち、つまり日本で生まれた子たちは、日本語は多分できる、普通に日本人と同様にコミュニケーションができますけど、学校の勉強がついていけないという問題は、随分前から出てきていることなので、いわゆる学習のための日本語というのが必要です。第二世代の子たちには、普通にはコミュニケーション取れる、多分会えば全然日本人と変わらないではないかという話になると思うのですが、現実的には例えば中学校の授業が分かっているという話はあると思うので、第二世代の子たちは多少違った方法が必要なのかなと、見てきていて思います。

あと、少し前のほうに戻るのですが、補足として。やはり日々困るからということもあるし、今回の震災みたいなときに、何かあったら困るからということで日本語を勉強することはもちろんなのですが、もう一つ、永住申請のために厳しくなったというのは現実的な事実なので、それに対して手当をしてあげないと、厳しくなるばかりで権利は保障されないというままになってしまうので、そこは手当をしたほうが良いということが一点。あと、もう1個だけ、これはぜひ、もし聞いていただける方がいれば、今でもやっていると思うのですが、日本には中国帰国者という方々がいて、あの方々にはたしかオンラインでもう既に日本語の学習が走っていたはずなのです。御徒町にあったと思うので、そういうノウハウとかは、もしかすると、多分オンラインというか、カセットテープとかの時代からおやりになっていると思うので、そんな方法もあるかなと思いました。

すみません、以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。中国帰国者に対する支援は、生活日本語の事例の先駆けになりますので、その辺りのものというのは、いろいろ参考にできると思いますし、どういうふうにそのネットワークをその後つくっているかというのは重要なと思います。

それから今、長谷部委員がおっしゃった、第二世代ということになると、学校に通っているということが基本的には前提になってくるとと思いますので、この学校を通して、その保護者に対してアプローチするという方法もあるのではないかなというのも伺っていて思いました。

ほかにはいかがですか。

チョウチョウソー委員、お願いします。その後、加藤委員。

○チョウチョウソー委員 チョウチョウソーです。僕らのミャンマーコミュニティ、ビルマコミュニティ内で、一世と二世とでは、大きな問題は一世。日本語をちゃんと勉強できないので、職場で話している言葉、それだけ。勉強する時間等の環境としては、それ以上は難しく、朝から晩まで働いて、お休みにはちゃんと休みたい。勉強しにくいとか。その人たちをどういう方法で引っ張るかということが一つのポイントだと思う。

ここで生まれた二世の場合、その子供たちの頭の中は日本人。学校に行ったら、もう日本人の子供たちと一緒に遊んで、勉強して。大きくなったときは、自分は日本人だと思っていますから、その子供たちの場合はそんなには問題ない。

もう一つ、ミャンマーのコミュニティで変わった一つは、最近ミャンマーから来日した、その家族。その子供たち、小さな子、小学校1年生、2年生ぐらいは、6か月、あるいは1、2年間ぐらいで日本語で話せる、できるようになるのですが、中学生は、それは大きな問題ですよ。大きな子なら日本語が分からない。でも、算数とか英語とかは問題ない。分かる。でも、それ以外が問題。それで学校に行きたくないという気持ちになる。その子供たちにどういう方法で日本語を教えるかということは、一つの課題かなと思います。

それは僕らミャンマーのコミュニティ、ほかのコミュニティは同じかもしれないのですが、そういうことも東京都として考えるべきかなと、僕はそう思います。

以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。

加藤委員、お願いします。

○加藤委員 加藤です。よろしくお願いいたします。2点あります。

1点目は今の第一世代、第二世代というところ。2点目は長谷部委員が最初におっしゃった制度のことで、二つ申し上げたいと思います。

第一世代、第二世代の問題です。今お話に出たとおり、第一世代については、私自身も接している方々がいて、非常に大きな課題だと感じています。第二世代については、今おっしゃったように学校の問題ですね。なのですが、私は第二世代について申し上げたいと思います。第二世代の人たちは親の苦労を見ながら、自分自身もとても苦労しています。自分の中に親の国、自分のルーツとなる国があり、そこに日本というのが入ってくる。恐らく第三世代になると、完全に日本で育つことになると思うので、そこからまた全く違ってくるのだと思うのです。この第二世代の人たちを、単に大変な人たちと捉えるだけではなく、別の見方ができないかと、私はずっと思っています。グローバル人材という言葉がありますが、日本の考え方では、日本人を留学に出して、海外でグローバル人材にする。それから留学生を何十万人入れて、その人たちをグローバル人材にする。だけれど、この第二世代の人たちこそが両方の文化を持っていて、日本の文化も分かっているし、分かるための努力もしてきた人たちで、そういう人たちを大変な人というふうな捉え方ではなくて、まさしく今後、私たちのことを引っ張ってくれる人と見ることができないかと思っています。

もう一つ言うと、ちょっと余談で東京都の話から外れますが、海外にいる日本にルーツを持つ子供たちも、まさにグローバル人材だなということも、いつも思っていることです。これが1点目です。

それから2点目の制度のほうなのですが、制度が本当に厳しくなっていますよね。社会批判も浴びるほどに。共生社会を目指すと言っていたところが、秩序ある共生社会という、秩序という言葉がついた瞬間に、いろいろな規制が出てきて、これはもう日本にいないでくださいって言っているようなものではないかと思うのです。

ただ日本社会としては、これから本当の意味での共生社会というのがないことには日本が継続していけないわけで、だけれどその秩序あるというのが出てくる理由もあるのだろうというところは理解しています。

ですので、ここで新たにできた、その制度の中で、日本語能力を含めさまざまな条件が引き上げられてきています。その引き上げ方の問題はありますけれど、これからの日本の社会を共につくっていくということを考えると、この引き上げられたハードルをどうやって一緒に本当のものにしていくかだと思うのです。そうではないと日本は本当に選ばれなくなって、近隣諸国のほうがよっぽど住みやすいし、入りやすいというのが現実ですね。

ですので、ここで私たちができることは、まず第一歩となる言葉の問題というのは非常に大きいので、そこをきっちりと長谷部委員がおっしゃったように、ただ単に、こんないいところがあるよということを紹介するだけではなくて、日本語を学ぶことが当たり前のこととして位置付けられるような仕組みが必要だと思います。強制力というと非常に強く聞こえてしましますが、そうではなく、日本語を学ぶことがその後の人生にとっても、また私たち社会全体にとってもいいことなのだというような形をしっかりとつくっていくことが必要なのではないかと、とても思っています。

以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。では、神吉です。

私はどちらかというと、義務化には懐疑的なところがありまして、もちろん今お話に出てるように、それが権利につながるということはすごく重要なのですが、やはり自分たちで学ぼうと思わないと学習効果が上がらないというところが非常に大きいかなとは思っています。そう考えると、何らかの形でみんなが学ばなくてはいけないなと思うような空気感をつくっていくという意味では、先ほど長谷部委員のおっしゃった、例えば条例というのは一つ面白いなと思って伺っていました。

全然違う分野ですけど、佐賀県に行くと、佐賀の日本酒で乾杯という条例があるのですよ。一杯目は佐賀のお酒で乾杯しようというのが条例で、それが居酒屋に書いてあるのですね。そうすると何となくせっかくだからやろうかって、注文してしまうわけですね。何かそういう強制力があるものではないのだけど、そういうのを推進していますというようなものというのは一つあるのではないかなと思いました。

もう一つ、インセンティブの付与というところが、非常に重要なポイントになると思いますけれども、そのノンインセンティブの皆さんが学びたいと思うようなインセンティブについて委員の皆様から何か御意見等ございますでしょうか。

この資料では、例えば都の多文化共生や地域づくりに貢献する活動にポイントを付与するというのが例として、出ていますね。このポイントは恐らく地域で何か使えることになるのですかね。これ何かポイントがあると、どこかで買物するときに 500 円割引になりますとか、そういうことですか。イメージとしては。そうですね。

ほかにもいろいろありそうですけど、いかがですか。

阿久津委員、お願いいたします。

○阿久津委員 One Terrace の阿久津でございます。よろしくお願いします。

入念に準備してきましたので一言言わせていただければと思います。ありがとうございます。

今のお話を聞かせていただいて、今、議論のテーマとしてはトピック1の学習の入り口に
つなげるための機能の例というようなところでのお話かなと思っております。ポータルサ
イトをつくっていくという方向性は示されていると思うのですが、あくまでもポータルサ
イトというのは入り口でありますので、皆様の力を集結して、人を介在した支援というのは
絶対必要だろうという立場でございます。

その中で、今までの議論の中には、かなり賛同する部分も多いのですが、なかなか
強制力によって日本語学習というのが、モチベーションの観点でいうと全く興味がないと
ころから、外因的動機という形で、強制力を働かせて勉強してもらう。そして神吉委員がお
っしゃっていたように、内因的動機によって学習が進む、このステップを踏ませるというの
は今回、今日お手元の資料にも示されているとおりにかなと思っております。その中でこのイ
ンセンティブといったところが、外因的なものと内因的なものどちらも誘発していく、ステ
ップを踏ませていくというのが大事かなとは思っております。

その中で、まず告知、知らしめるといった意味では、先ほどの一世、二世の話もありまし
たけれども、都からの、こういった海外にルーツを持たれている方への日本語学習機会の御
案内であるとか、それからお子様が教育に通っているときに、親御様の日本語教育のこうい
った機会があるということの告知、こういったような知らしめる、認知拡大といったところ
はかなり重要なと思っております。

またインセンティブといったところで、お答えさせていただくとですね。結構東京都のポ
イントというのは便利な反面、結構一般都民、私も都民になりますけれども、不満が出やす
い箇所かなと思っております。昨今の逆風みたいなところですね。というのがありますので、
どちらかというところの在留資格という観点で、日本語ができたほうがいいよね、もしくは日
本語ができると、より暮らしやすいよねといったところをどう伝えていくか、そういった意
味でのインセンティブという方向性も一つ必要なかなと思っております。

そういった伝えていく役としてコミュニティリーダーの方たちが、国単体のリーダーだ
けではなくてコミュニティリーダーの方たちが連動して、一緒に考えていくといったところ
の会議体であったりですとか、連携みたいなところというのは一つ必要であろうと考えて
おります。

○神吉座長 ありがとうございます。東京都内では今、その外国籍の方の会議体みたいなもの

のってありますか。例えば川崎市などは外国籍住民会議でしたっけ。ちょっと正式名称は覚えていませんけども、ありますよね。都内でそういう事例ってありますか。どこか、区市で。あんまり聞いたことないです。ないですよね、多分ね。

○事務局 区にはあると思います。

○神吉座長 区にはありますか。分かりました。ちょっとまた情報収集する必要があるかな。

○事務局 そうですね。墨田のとかそうですね。

○神吉座長 長谷部委員、お願いします。

○長谷部委員 ごめんなさい。これは私がちょっと関わったというか、たまたま立ち上げを見届けたからで、いわゆる川崎とか神奈川の外国人代表者会議ではないのですが、新宿で今インターナショナル何とか会議、多分、要はビジネスを大久保でやっている人たちが、大久保を盛り上げていきたいと思いますというので立ち上げた、会議体というよりどちらかというビジネスミーティングの感じみたいなのですが、それで年に1回大久保まつりをやっているみたいなのがあって。あれは多分もともとネパール、ベトナム、韓国、日本で始めたのですが、今多分そこに中国も入り、何か国かの会議体。多分2か月に一遍ぐらいやっていて、それはお祭りのほかに、大久保の掃除もしようみたいなことをやったりしているので、あれは、ちょっと水準が違いますけどね。神奈川県とか川崎では、要は投票権がない代わりに意思表示をしようみたいな目的があるけど、そういうのではないのですが、そういうネットワークで何かやっているというのはあるかなと思います。

○神吉座長 ありがとうございます。ちょっと調べてみたら、新大久保インターナショナル事業者交流会というやつですね。なるほどですね。

一方で、例えば川崎とか神奈川の外国人会議的なやつは、やはりそのエスニックコミュニティの、もう本当に代表的な方、社会的貢献という意味でも様々な力をお持ちの方が出るので、もうちょっと、そうではない、より多くの一般的なという用語があるかもしれませんが、そういった外国人の方々が地域で少しつながりを持っていくというのはとてもいいかもしれないですね。ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。インセンティブの観点、またはウェブデザインの観点とかがありますか。

角南委員、いかがでしょうか。ちょっと振ってしまいますけど。

○角南委員 そうですね。インセンティブをどういう形で設定するかというのは大事な話だと思うのですが、これ、この後の話とも多分つながると思うのですが、学習のための

ポータルですという、学習にそんなに乗り気ではない状態だと、そもそもそのポータルに案内されても来ないというか、アクセスしない。アプリなのか、サイトなのか、形は分からないですけど、そこにアクセスしないとなってしまうと、あるいは本当にたまにしかアクセスしないみたいな状態だと、いかにそこにいろいろなコンテンツがあったとしても、学習の何か仕掛けが用意してあったとしても、接触時間が短か過ぎて、使わないという形になってしまうので。もちろん目標としては日本語学習というところが、ポータルの大きな目的ではあるのですが、何か極端に言うとか何もないけど毎日立ち上げるアプリというか、見るみたいな形で、学習目的ではないのだけれども、何かニュースを見るとか、お天気を見るではないですけど、1日の中でそのアプリをなにげなく起動してみるみたいな形、そういうような習慣になるようなコンテンツというのがあって、見に行ったらいいことあるよ、例えばポイントが貯まっていくとか、何かアプリ内でのキャラクターが成長していくみたいな形で。学習目的で、さあ勉強するぞというよりかは、もっと気軽に定期的に見ていくというようなものになり得るコンテンツがあるよという形で案内して行って、それを見ることある程度習慣化していく中で、学習にもスムーズに移っていけるという形が必要かなと思うのです。日本語学習とは直接は関係しないのだけれども、見に行くと面白いとか、役に立つ何かがあるとかって、何かを探すときにここに行くというので、常にそういうところでのポータルですよね。そういうのが用意できると、いろいろな動機でそこに行くことができるので、その後の継続とかも含めて、身近にそのポータルを感じてもらおうというアイデア。具体的に何がというのはないのですが、必要かなと思いました。

○神吉座長 ありがとうございます。確かにそうですね。毎日開くと、何日連続みたいな。外国語会話アプリではないですけど、私は今、1,070日ぐらいで、もう絶対やめられない感じに今なっていますね。もう必ず取りあえず開くみたいになっていますけれども。そういうのはあるかもしれない。

富田委員、お願いします。

○富田委員 町田国際交流センターの富田と申します。

参考になるかどうかは分かりませんが、町田の私どものセンターで学習者による日本語発表会を年に1回、市内の日本語支援団体合同で開催しています。発表した方に対しては、発表後に感謝状という証明書のようなものを発行しています。一応日本語学習の成果として、きちんとしたステージに上がって発表できたこと、日本人の市民の方々に対するの貢献的な行動という意味も込めて、発表した方を表彰する形で毎年実施しております。

日本語を習って、ここまでできるようになったということは、学習者本人にとっても励みになりますし、そのような取り組みを継続してやっているのです。あともう一つ、学習の入り口につながるための機能として、町田市の場合は、行政で市民課の外国住民登録の窓口で、国際交流センターの支援事業について、例えば日本語教室学習に関する情報と、外国人児童のための子ども教室の支援、それから外国人相談を掲載したチラシを、初めて住民登録に来られる外国の方に、必要に応じて3言語のチラシを手渡しするようにしています。そのことで結構効果が見えたのは、町田市に移住してから、しばらく経ってから、そのチラシを持ってセンターに訪れる方が実際にいらっしゃったことです。実施してから、まだ二、三年ほどなのですが、少しずつ効果がでてきています。行政の窓口も結構忙しい中なので、個別にいろいろな案内チラシを配布するのはなかなか難しいということでした。なんとかこうした情報をまとめた一つのチラシを配布していただけるようになりました。

もう一つは、日本語の学習に誘うためのものなのですけれども。当センターはボランティア中心の活動となっていて、例えば外国人の方が市民病院を利用する際や保健所の新生児家庭訪問などで、保健師が外国人の家庭を訪問する際にはうちのセンターから同行通訳としてボランティアを派遣しています。そのボランティアが通訳の中で、親子が困っていることなどを聞き、センターの地域日本語教室について情報提供していただいたりしています。また、町田市には子育て支援センターや相談センターもありますが、職員の方々が、コミュニケーションに非常に困っているような状況も続いています。そうした中で、関わっている職員の方々からもセンターの活動を周知していただくことで、多くの方が日本語を習いに来るような状況が続いております。

あとは教育センターも同じように、三者面談や通訳の派遣の際に、お母さん方に「国際交流センターで日本語を習えますよ」と伝えていただいたり、子どもたちにも、「子ども教室がありますよ」、と紹介していただいています。そうした取り組みが学習への入り口につながっているのではないかと思います。

以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。先ほどのウェブデザイン的な観点からすると、入り口をまず何か、まさに取りあえず開くみたいところがあって、そういうときのインセンティブというものと、それから今、富田委員がおっしゃってくださった、さらにいろいろなことに取り組んでいく中での社会参加とか、自尊感情が高まっていくというような意味でのインセンティブというのと、いろいろな階層がありそうなので、その辺り少し整理できるとい

いなと思いました。

またちょっと時間の都合もありますので、この議題、ここまでにしますけれども、外国ルーツの皆さんがどういう情報をお得と捉えて、毎日ちょっと見てみようかと思うかみたいな辺りは少し調査が必要かもしれません。

では、ちょっと一言だけ。

○加藤委員 短く言います。一言だけ。

今まさにそれを申し上げようと思っていたのですが、本当にそこが必要だと思います。今、主に日本の人のほうが多い環境の中で何がいいかと考えても、それは結局私たちの側の考えでしかないわけですね。ですから、ここにも何人かもいらっしゃいますが、当事者の方々自身が主体になることが大切だと思います。先ほどの新大久保の事例でも川崎でもそうなのですが、その方たちが主体となって、そこをベースにして、私たちはその後ろで、後方支援としての仕組みをしっかりとつくっていく。強制力についても、表向きに何か強制するというのではなくて、気づいたら、あれ、参加していたみたいなのができる、結果的に社会にとっても、それから当事者の皆さんにとってもよいものになるのではないかと思います。

加藤でした。

○神吉座長 ありがとうございます。

それでは、今いろいろな形で御意見が出ましたけれども、非常に興味深いものがたくさんありましたので、また事務局のほうで御検討いただければと思います。

続いて、二つ目の議題に参ります。

二つ目は、「学習の継続を支援するための機能」ということで、今の話と重なる部分もあると思いますけれども、御意見、各委員の方、お願いいたします。

特に日本語学習に今直接携わっていらっしゃる委員の亀井委員、それから山形委員、学習者の皆さんが継続していくときのポイントみたいなものがあれば、少しお話しいただければと思いますけど、いかがでしょうか。

山形委員、お願いします。

○山形委員 TNVN¹の山形です。日本語教室にやってくる学習者を見ていて感じることは、先ほど第一世代、第二世代というお話が出ましたけれども、私たちの教室には、第一世代の

¹ 東京日本語ボランティアネットワーク

親世代、ゼロ世代というのですか、その人たちがいる程度年齢が高くなって、日本にやってきます。子供たちと一緒に住むために。高齢になってから、60代、70代、そうすると数か月は教室に通ってくるけれども、やはり何かついていけなくなるのか、離れていってしまいます。そういう人が結構いるので、気にはなりつつも、どうしましたかと、こちらからは声かけができません。そういう人たちを日本語の勉強ということではなくて、何か日本語を手段として使いながら、日本とつながる場があれば、もっといいのかなと思います。

例えば日本文化を学ぶ、お花でも何でもいいのですが、日本語で歌を歌いましょうみたいなサークルがあって、そういうところに気軽に繋がっていけるような道があれば、一つの継続の形にはなるのかなと思います。

以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。

亀井委員、いかがでしょう。

○亀井委員 せたがや国際交流センターの亀井です。

議題として学習の継続ということにはなっていますので、その観点でちょっとお話ししたいと思いますけれども、まず入り口もそうなのですけれども、今回の議論の中では、その学習コンテンツについては議論の対象に多分なっていないと思うのですけれども、国がつくると言われている学習コンテンツがすばらしいものであることが全く前提で、これが本当に使えないものであった場合には、この議論は全く意味がないことになってしまうので。あともう一つ、都がそれを利用してというか、活用してポータルサイトをつくるということが前提の話だと思うので、そういう話で行きたいと思います。まず、デジタルの世界でもDXを利用したとかというのは全く当たり前だと思うので、それをやるとして、人が介在した伴走支援というのは全くそのとおりだと思うのですね。これ本当に頑張ってやってほしいなと思います。できたらすばらしいと思います。

その中でチューターとかという話が出てきますけれども、そういう、人をどういうふう to DX の場に配置してちゃんと回っていくようにするのかというのは非常に重要だと思っています。そのときのチューターは、前のほうの資料だと留学生を使ったりとか、大学生の勉強している人たちを使ったりとかという話が出ていますが、本当にこれでいいのかと私は思っています。留学生は基本的には人がどんどん変わっていってしまいますし、勉強する学生も変わっていってしまうので、しっかりと人をつくっていかなくてはいけないと思いますし、その人たちには正当な対価を払って、持続可能である組織をつくってほしいとい

うふうに思います。

そこまでやって初めて整備だと思いますので、そこをやってほしいと思っています。あとチューターと言われる人たちに外国人の人たちを入れていくということが入り口を低くすることになると思います。困ったときに相談できるという機能を、それも機能だと思うのですが、それを入れていくということになったときには、やはり母語で話せるとかですね。国が同じだとか、そういう観点で相談ができるという機能があったほうがいいと思います。

そのオンラインの中にいるチューターの人たちは、コミュニティの中の代表する人がいいとは思いますが、そこは年齢が難しいかもしれませんがね。ある程度最初にたち上げるときにタレント性のある人が中にいてもいいと思うのです。オンラインの中にそういう人たちがいて、一緒に勉強してくれるとかですね。そういうようなエンターテインメント的なことも入ってもいいのかなと思います。有名人がいてもいいと思いますし、SNSのインフルエンサーの人がいたほうがいいと思いますし、日本語学校の人気講師の人が出てきてもいいと思いますし、あとは見つからなければ大使館の人たちに御協力いただいて、いい人いませんかみたいな話で登場してもらったほうがいいかなと思っています。

オンラインの中にもそういうチャットですとか、オンラインで相談できるという機能が必要だと思いますし、あとオフラインでも、さらに三つ目の事業になるかもしれませんが、地域につなげるというところだとしても、人が必要だと思いますので、そういったチューター機能というのは非常に重要ではないかというふうに思っています。

○神吉座長 ありがとうございます。人とそれから DX と両方でのチューター機能というイメージですかね。

ほかには。長谷部委員、お願いします。

○長谷部委員 明治学院大学、長谷部でございます。

今の亀井委員のコメントに基本的には全面的に賛成で、チューターが大事というのはあるので、支援者の養成、もちろん留学生や日本語教育を学ぶ学生はもちろん、現場で一番使い勝手がよい大学生を使うというのは、ありではないかと思うのですが、やはりもう少し責任のある方々に来ていただくという、いわゆる日本語教育をやっている人、日本人の側でもきちんと責任ある人、なおかつ、同国なり同胞の人たちが教えるというようなことは大事だと私も思います。

ということがあるのですが、一点だけ思ったのは、大使館は若干危ないときもあり、難民の方の場合は敵対している人である可能性があるのです。大使館はいいときと悪いときがあ

ということだけ、お伝えしたほうがいいかなと思いました。

あとは、学習意欲を維持する機能ということかというと、入り口とどれくらい違うのだという気もちょっとして、最初の1個目のテーマとかぶるのですが、ポイ活が私は大好きで、正確に言うと私だけではなくて、高齢者の母がポイ活が大好きで、そうすると毎日チラシを見るわけです。それは多分日本の方もたくさんやっていると思うので、何かこのスーパーが安いとか、それを簡単な日本語で見ることができることで、お得なスーパー情報が出てきますよみたいなインセンティブがあるほうがいいかなという気がしているということ。もう一つ、ジェンダーはやはり考えたほうがよくて、女性の外国籍の方、ネパールとかは分からないですけど、ムスリム系統の人たちは女性が外に出ないというのが文化として守られているということもあるので。何でこんなことを言っているかというと、夏休みに映画を見て、お母さんたちが集まっているところに日本の人が教えに行っている映画なのだけど、顔が一切出てこないのですね。ムスリムの人なので顔は出せない、というような文化を持っている人もいます。勉強が継続できない、勉強しない層というのは、高齢者か女性だと思っているので、そういう意味ではジェンダーに対しての配慮というのもある一定数、日本人が思うよりもしたほうがいいのかなということ。ポイ活、女性がスーパーぐらいだったら旦那さんに怒られないで出ていけるでしょうみたいな仕掛けがあったほうがいいのかなって思いました。

○神吉座長 ありがとうございます。例えば、頭の体操的にですけど、女性のため、女性を対象とした日本語クラスみたいなものがあると参加しやすくなる人がいるかもしれない。

○長谷部委員 もしかするとお母さんって言ってあげたほうが、日本的には嫌なのだけど、お母さんのためのって言ってあげるといいうほうがいいのかも。でも今ママでやっているところたくさんありますよね。都内にもたくさん。日本人だと、えって引いちゃうかもしれないですけど、お母さんのためのというのはある一定、響くかなと。それは今都内でも多分お母さん対象の日本語、あるいは生活支援をしている団体というのもたくさんあると思うので、そういうところにお話を聞くと、いろいろな方法が出てくるのではないかなという気はしています。

○神吉座長 ありがとうございます。チョウチョウソー委員。

○チョウチョウソー委員 チョウチョウソーです。日本語学習という言葉を使ってもいいですけども、もうすこし柔らかくして、例えば大人、年上の人たち、日本の生活、毎日生活に使う言葉とか、先ほど長谷部委員の、スーパーに行くとか、銀行に行くとか、病院に行く

とか、そこで使っている言葉、役所に行くとか、そういうところで使っている言葉というか、そこら辺気楽に参加できるように、そういうことをもうすこし柔らかくして。イメージとしては、「学習」といったら、日本語能力試験 N5 とか N4 とか、そういうイメージもあります。そうではなくて、ここで住んでいて、毎日生活に使う言葉、それをできるだけ関係をつけて教える。そういうのならば、継続はできると思います。私ここまで、こういうことはできましたという自信があると、もっと前に進むことができるかなと僕はそう思います。

取りあえず、以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。都のサイトという観点でいうと、特定企業さんのものがいっぱい出てくるのは、すこし難しさもありそうですけれども、でも、一方で先ほどの入り口でもあったように、お得な情報、どうしてもそういう経済活動にも関わってきそうなので、その辺は何かこう、超えられるハードルを考えてみるのはありかもしれないですね。

阿久津委員、お願いします。

○阿久津委員 ありがとうございます。One Terrace、阿久津でございます。

この観点なのですけれども、3点ほどございます。一つが今のお話の中で言うと、実は私どものほうでもいくつかの自治体のところで、地域住民と外国人住民の方が交流できるアプリみたいな実証実験を何度かやらせていただいたのですが、あまりうまくいかなかったという結果がございました。

その中で一番インセンティブが効いたのが、例えばコロナのときの補助金を全住民に配りますといったときには、全くリーチできていなくてどこにいるかも分からなかった外国籍の住民からもすぐにアクセスがあったというのがあるのですね。それ以外の情報については全く反応がなくてですね。地域のクーポンを配るとか、スーパー情報とかというのも実は試したんですけれども、全然効かないのですね。何も反応がなかった。そういうことがありました。

それから、そういったプラットフォームにしていくと、個人情報の問題ですとか、犯罪の可能性ですね。巻き込まれてしまう可能性というのがあるので、なかなかそういったプラットフォーム上での交流というのが非常に難しかったなというところがあります。

これは少し飛躍になるかもしれませんが、日本語がそんなに得意でない住民が増えていったときの将来的な社会コストというか、要は結構税金を使わないと対処できなくなってくるというリスクに対しては、今この段階から皆さんに日本語を積極的に勉強していただくということが非常に重要かなと思っております。何か、そのインセンティブは、都のポイ

ントもそうなのですが、都民税や何かと相殺していただけたらかですね。そういったところが多分一番効いてきそうだなとは、これまでの経験からはあります。実現できるかどうかはまた別の議論かなと思っております。

二つ目ですが、先ほどの亀井委員からもありましたし、角南委員からもありましたが、学習を継続させるためにはやはり何かしらのインセンティブというか、ゲーミフィケーションとかエデュテインメントみたいな発想というのは非常に重要かなと思うのです。このポータル上で活性化していくときに一人一人がしっかりと学習ができるかどうかについては、どうしてもやはり伴走していく誰かが必要になるというのは、いろいろな経験豊富な皆さんからも実感としてはお持ちのところかなと思っております。

資料のほうにはチューターという、いわゆる学習の支援をする者というところで、これが同国出身者の方の支援の在り方だとか、それから日本語講師の方の支援といったところを想定しているといったところは見えるのですけれども、もう一方で進路とか生活の指導、キャリアみたいなのところに関して言うとですね。モチベーション管理で言うとメンター的なポジションを誰がやるのかというようなお話。対象となる方が就労という観点でいうと、企業に所属している、恐らく特定技能等で、そこまで高くない日本語能力なのだけれども日本に入ってきている方たちといったところも、この11万人の対象になっている可能性あるかなと思っているのですが、そこに対しては、例えば国家資格であるキャリアコンサルタントの方たちの活用、そういったところも踏まえて、総合的に日本語学習といったところの先のゴール、そこを見据えた支援というものをここでやっていく必要があるのではないかなと考えております。

最後になるのですけれども、やはりそうですね。結構ここで書かれている学習の中ではライフイベントに連動した情報提供とか、学んだ日本語の実践機会の接続といったところが、資料のほうには案としては出ておりましたけれども、先ほどのチョウチョウソー委員がおっしゃっていたように、日本語学習という切り口ではなく、ライフイベントごとのその場面での日本語というとなら参加しやすくなるのかな。またそこを学んだことをすぐに病院の窓口とか、役所の窓口とか、そういったところでの活用といったところで試せる、そういったところが学習のモチベーションにつながるのではないかなと考えております。

以上になります。

○神吉座長　ありがとうございます。

加藤委員、お願いします。

○加藤委員 加藤です。今この継続支援というところで、学習者というか、外国人の方々のモチベーションの話が後半は続いたと思うのですが、それをつくる仕組み、DX も含めてですけれど、それと、実際にそこで学ぶ人たちとの間をつなぐ存在がとても重要だと思います。先ほどから伴走とか、チューターとかという言葉が出ていますが、そこをしっかりとつくりたいといけない。実際に学んだり、何か一緒に参加したりする人たちにとって、顔が見えているのはその人たちなわけですね。ですから、そこを何か新たな支援者として作っていくことが必要だと思います。これまで地域で支援してくださってきた方々がそのまま同じ形で続けるということではなく、一度つくり直すというような意識です。世代からいうと恐らく若い世代が入ることは欠かせないところだと思いますし、さらにそこに外国籍の方が実際に入っていくことが重要だと思います。そしてそれを持続可能なものにするためには、亀井委員が最初おっしゃいましたけれど、そこに報酬というものが必要だと思います。善意にだけ頼っていると、忙しくなったから抜けますということになってしまいます。それが本業にまでなり得るかどうかは、何ともですけれど、何であれ責任を持ってそれをする。その思いを持続していける人を、どのように仕組みとしてつくっていくかということは非常に重要だと思います。ここのところいろいろ話を聞く中で、自分を大事にしてくれた経験というのはとても大きいのだと感じています。自分たちの小学校、中学校での経験で振り返っても、やはりそういう経験はありますよね、という話を、ついこの間もしていたのですが、何かそういういった関係をきちんとつくるのが大切だと思います。

DX だけに頼ることについて私が問題だと思うのは、つくったからと言っても毎日更新されるような、よほど楽しいゲームでなければ誰もやらなくなると思うのですね。なので、ここにどう人を介在させるかということが重要だと思います。

もう1つだけ。お母さんの話が出たので思い出したのですが、自分の学校で地域になじむためにお母さんの日本語教室というのをしていたことがあります。そのときにお母さんを主人公にしようという企画をしたのです。つまり、先生が教えてあげるのではなくて、お母さんたちから学ぼうという発想です。一つは各国の子育ての違いをしたのですが、そうすると保健師さんなどが聴衆として来てくれるのです。それから学校が御徒町に近いので、インド人の宝石商の奥さんたちがたくさんいて、そうするとその方たちは、何十何掛ける何十何といった計算を暗算でできるなど、日本人の私たちが知らないような算数の方法を知っているわけですね。そうすると、そこに日本人のお母さんたちが自分の子供にもっと九九以上のものをさせたいと参加するようになる。そこで関係が変わるのです。教える人と、教え

られる人が、逆にもなる。そのような場をつくることが結果として一緒に生きていくことにつながるのだと思います。私たちがいつもしてあげる側ではない。そういう認識を持った人たちの集団をうまくつくっていったらいいのではないかと思います。

○神吉座長 ありがとうございます。今のお話を伺って思ったんですけど、このポータルというのは、今我々は外国人、外国籍とか、外国ルーツの人をメインターゲットにしているけど、実はそこに興味のある日本人がこのサイトに来ると、いろいろと情報が得られるみたいな方向もあってもいいのかもしれないですね。そうすると、日本人側から「こんなことがあるのだったら、こういうイベントに自分たちも参加してみよう」みたいなものとか。もしかしたら、我々は片方からしか見ていなかったような気がしますね。ありがとうございます。

チョウチョウソー委員、お願いします。

○チョウチョウソー委員 チョウチョウソーです。一点だけです。

継続とインセンティブとのつながりということが言いたいんですけど、例えば日本語の勉強、日本の生活で使っている言葉の勉強、そういうことのために、エンカレッジして、日本語をできると、こういうチャンスがありますよということを伝えればいいのではないかなと。例えば、自分は日本語が少しできて、それで国家試験とか、例えば特定技能の試験とかとることができるよ、そのためには、いろいろな情報とかサポートとかありますよ、シェアできますよという、そういうインセンティブがあれば、もっと勉強ができるかなと。だから資格試験を我々はできますよということを、ポータルサイトを通して、日本語がもっとできたら、こういうチャンス、それが日本に定住する、永住するのも、そんなには大きな問題はないかなという、役に立つよということをエンカレッジすればいいのではないかなと思います。

○神吉座長 ありがとうございます。先ほどから出ている御意見で、日本語を軸にした設計ではなくて、ライフイベント、ライフサイクルを軸にした設計というほうがより多くの方に有益、有用なのではないかということですよね。ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょう。亀井委員、お願いします。

○亀井委員 その最初の入り口のところの話にもあるかもしれませんが、東京都の皆さんには頑張っていただいて、東京アプリの中のメニューの一つに、これが入っていくというのは非常に意味があると思うのですね。日本人の人にも意識してもらうということと、外国人の人もそこからアクセスできるということが、非常に意味があることだと思うので、その東京アプリからポータルにリンクするとかですね。そういうことができるとすごくい

いかなと思います。

ポイ活の話もありましたけれども、東京ポイントですね。差し上げるというのは東京都の判断でできることではないかと思うのですよね。資料の 23 ページのところには多文化共生が地域づくりに貢献する活動にポイントを付与するというのは、ちょっとあまりにもハードルが高いのではないかと思うのですね。まずはポータルに登録してもらって、例えばそのポータルの利用方法とか日本語教育に関する、こんなことが東京都ではあるのですよというようなビデオを見ました。それから、そのアンケートに答えましたみたいなことを一連にやったら、ポイントを差し上げますみたいな、そういう仕組みがあると、その入り口のところになると思うのですね。そういうのを頑張って施策をまとめていただいて、広報ができるように、まとめていただければなと思いますけれども。

○神吉座長 ありがとうございます。私は都民ではなかったので、東京アプリの存在を知らなくて、すみませんでした。

○亀井委員 東京アプリはかなり普及しましたね。かなりのインセンティブのお金というかですね。ポイントが付与されて。

○長谷部委員 何か買えるのですか。

○亀井委員 普通に電子マネー。

○事務局 1 万 1,000 円の生活支援というのをやっけていまして、マイナンバーとリンクすると、東京ポイントから申請すると、1 万 1,000 ポイントもらえる。

○亀井委員 登録するだけで 1 万 1,000 円、テストに参加するとさらにとかいうのがありましたよね。だからそういうのがあるので、ぜひ使ってもらいたい。

○加藤委員 D ポイントともリンクして。

○亀井委員 そうですね。今回 PayPay も使えるようになりますと聞きましたので、より使いやすくなったと思うのですね。そういうのを活用してほしいなというふうに思いました。

○神吉座長 なるほど。ありがとうございます。

○チョウチョウソー委員 僕は都民ではないですから、それこそ東京ではないとできないですけど、そういう情報をコミュニティ内、みんなアクセスしてこういうことだよって、僕は都民ではないですからこういうことはできません、あなたたち都内に住んでいるのですよね、やってくださいと言いましたけど。

○神吉座長 そうすると東京都に住みたいなというインセンティブになりますよね。やはり東京都はいいですねという。

ほかにはいかがでしょう。よろしいですか。

長谷部委員、お願いします。

○長谷部委員 実は3の話ともつながってくると思うのですが、三つ簡単に言います。

一つ目はチューターが大事という話のところなのですが、そこそ第二世代をターゲットにしていきたい。意図的にインセンティブをつけてターゲットを付け足して生活ができるようにし、なおかつロールモデルにしていきたいというのが一点。

2点目は、高齢者の話なのですが、やはり現場に誰かが行けるようにしてあげる。高齢者は明らかにオンラインは難しそうなので、それをどうつなぐかというところは、結局第二世代なのではないかと思うのです。そこに入っていく人をつくるというのが2点目。

介護施設は多分もう中国の方とか独自にやっておられますよね。中国の方のための中国の方の介護施設があると思うので、そういうところを利用していきたいのが1点。

最後なのですが、ポイントについて。それこそスタンプラリーみたいにして、それがその地域社会との接点とつながると私は思っているのです。今ライフイベントという話しましたが、役所に行ったら1ポイント、近くの公民館に行ったら1ポイント、学校に行ったら1ポイントみたいな、生活をダイレクトに、そこで日本語を使いましたという証明はできないのですが、行ったことぐらいは証明ができるはずで、そうするとやはり外に出ていけない人が外に出られるという話で。私が思ったのはポケモンGOを思い出して、外に出なくてはいけないというがあるので、外に出るためのインセンティブをつくるというのは、役所とか病院とか学校とか、スーパー、商店街でもいいと思うし、あと各区の役所、図書館とかでもいいかもしれない。そういうところにQRコードをつけて、ピッとやると、外に出ましたというポイントがつく。

何でこんなこと言ったかという、私昨年ですね。大江戸線とエド・シーランのコラボキャンペーンのスタンプラリーに参加したんです。各駅に行くとエド・シーランのマークがついて、六つもらえると、エド・シーランのステッカーがもらえるというやつで、もう都民でも何でもないのに、ふだん都営地下鉄など絶対乗らないのに行ったのです。ということは、多分都にノウハウがあるわけですね。そのポイントを。ここの場所に行くと、QRコードを読むと、ピッと、私はそれこそ浅草とか蔵前とか、新宿三丁目とか、そういうところもらっている、そういう仕組みを応用してスーパー、図書館、役所、少なくとも住んでいるところの役所の外国人住民に関わる窓口にピッと行ってきましてとなると、先ほどの亀井委員がおっしゃった、その動画を見るだけのポイントと同じようにできるかなと思ったこ

と。

ごめんなさい、ついでにもう一個しゃべっていいですか。ポイント付与のほうはもしかするとこれは日本人にもポイント付与すると、見たら、そうか今、外国の人って困っているのだみたいな、まさに多文化共生につながることになるかなと思うので、そちらのインセンティブもあってもいいのかなと思いました。

○神吉座長 ありがとうございます。スタンプラリーはやりますね。

○長谷部委員 はい、神奈川県から東京に来てやりました。

○神吉座長 ありがとうございます。

それでは二つ目の議題ですね。いろいろな観点でまた御意見いただきまして、ありがとうございます。

では三つ目ですね。「地域社会との接続を促すための機能」ということで、いかがでしょうか。この辺り、北区の佐藤委員、いかがですか。地域社会とのつながり、外国籍住民の皆さんということ。

○佐藤委員 北区の佐藤です。この1番と2番のお話を聞いていて、非常に勉強になるなと思う一方、とても今、難しい問題だなと思っていて、自分の中でもいろいろな感情というか、思いというのが非常に揺れ動いているところです。

すこしまとまりのない話になって恐縮なのですが、皆さん、ここに来ている方は、特にチョウチョウソーさんであったり、シュレスタさんであったり、多分非常に御苦労なさって、日本で溶け込もうと思って頑張ってやってこられた方だなと思いますし、大学の教授の先生方でしたり、委員の方々皆さん、何だろ学術的な研究等もされていらっしゃる中で、今御発言なさったような思いということに至っていらっしゃるだろうなというところをすごく受け止めたところ、学んで吸収させていただいたところです。

一方、私は御存じのとおり自治体から来ておりますので、やはりダイレクトに住民の方の声というのを聞くのですね。長くなって恐縮なのですが、北区ではもともと、総務課という、いわゆる役所の中で何でもやらないといけないという部署で、国際交流であったり、多文化共生というところをやってきました。ただ、もう1割が外国籍区民の方というのが北区なのですけども、そういう状況の中で、専門的な部署がないと耐えられないということで、この4月から部署ができ、私が担当課長として着任をしたということです。

蓋を開けてみると、ものすごく区民の方からの苦情が多いのです。実際問題。例えば、マナーがなっていない。本当によく聞く話だと思いますけど、ごみ捨てのマナーがなっていな

い。公園で深夜までサッカーをしている。そこで恐らくお酒も飲んでいる外国人の方もいるのではないかな。怖くて通れないというような苦情がすごく多くてですね。それを自治体の窓口としては一手に受け止めているという状況です。

何ていうのかな。別にそういう発言している方って、いわゆる差別的な感情を持っている方だけではないのですね。恐らく元からあまり外国人は得意ではない方もいらっしゃると思うのですが、やはり今のこの現状の中で、何でこんなことになっているのだろうって純粋な不安というところを持っていらっしゃる方、すごくいらっしゃると思うのです。

ここまで、1番も2番もすごくいい議論がなされてきて、皆さん真剣に外国籍区民の方のことを考えていらっしゃると思う一方で、こういったことがきちんと日本人に伝わらないと、全然溝は埋まらないなと思っていて、今この話を、外国人、怖い、嫌だという方がフラットに聞いたら、そんな外国人って、日本人に考えてもらえるのだね、という感想を持つ方が絶対いると思うのですね。

ポイントの話も、先ほど長谷部委員が日本の方にもポイントとおっしゃって、私すごく大事だなと思っていて、外国人の方は専用アプリがあって、そこを見たらポイントが貯まるよ、動画を見たら貯まるのだよ。学習という、自分のためになること、基本学習って自分のためになると思うのですが、自分のためにやる学習をしたらポイントもらえるのって、ものすごく優遇されているというふうに捉える方っていらっしゃるのですよ。間違いなく。

私たち外国に観光とかに行っても、外国の方、そんなにゆっくりしゃべってくれないのですよね。うわーって英語でしゃべられて、分からなかったら、もういいよみたいにされるけど、日本はものすごく優しくて、分からない外国人が来たら、本当に役所、私の部署に限らずどの部署でもすごくやさしい日本語を使おうとします。丁寧にしゃべるし、ゆっくりしゃべるし、個人のスマホを開いて、アプリ、ChatGPTとかでもそうですけど、開いて何とか伝えようってすごくやるのですよ。それに対して、やはり一定の人は、距離感を示します。そんなにやってもらえているのだ、そこに時間を投入しているのだ、私たち日本人はそんなに丁寧にやってもらってないけどなって。

どうやってこういう部分の溝を埋めていくかというのを、本当に考えないと駄目で、それがまさに、この3の地域社会との接続というところにつながるというか、ここを目指さないといけないのではないかなと思うのですね。

先ほど高齢の方とかも親世代が第二世を、第一世を頼っているゼロ世代が来るとかもあると思いますけれども、何ていうのかな、本当にいろいろな方が来る中で、外国人の方が日

本人からやってもらえるだけの存在ではないのだよというところをつくっていかないと、本当に耐えられないというのが自治体の窓口で、今本当に感じていることです。

傍聴されていらっしゃる方もいらっしゃるので、適切な表現ではなかったら申し訳ないのですが、働いてくれる、社会を担ってくれるありがたいという側面はあるけれども、そうではなくて、やってもらうばかりになる人も中にはいるよねという、そこへの回答ってしっかり考えていかないといけない。なので、こういうポータルができて本当にいい議論がなされていて、すごく皆さんの思いもあると思うのですが、これもやはり、分かってもらいたい。それをやるのが基礎的自治体だろうと言われれば、本当にそのとおりなのですが、そういった面でも、これをやって本当に将来的に日本で役に立っていただくという言い方がいいか分からないですけれども、彼らが日本の中で何かを担っていただける存在になるというところを目指しているのだよということ、それを分かってもらえるような伝え方をしないといけないと思うので、非常に難しいと思うのですが、入り口の在り方であったり、継続の在り方であったりもそうですし、このまさに地域社会との接続というところのビジョンみたいなところを含めて、きちんと伝えていかないといけないのだと、非常にそれを強く実感したというところではあります。

すみません、長くなってしまいました。

○神吉座長 ありがとうございます。実際に差し支えない範囲で構いませんので、例えば窓口にいろいろな形のいろいろな声が届くと思いますが、それによって少し区取組として変えてきているものとか、こんなふうにすると、よりよいのではないかというのは、何か取組とか、または考えていらっしゃることであります。

○佐藤委員 そうですね。今本当にやっていることって、北区、手前みそながらいろいろやってはいるのです。多国籍の言語でニューズペーパーみたいなものを発行して、その中に健康保険や年金のお知らせ、これは外国人の方にとっても大事なお知らせだと思いますけど、そういったものを入れたり、あとは公園の使い方、公園はこういうふうに使ってはいけないですよとか、留学生の方だったら、アルバイトは月何時間までとか、あとキャバクラであったりはできないよみたいな、そういったことも情報ペーパーに入れて発行して、当然インターネットでも公開したりということはしています。

また東京都さんがお作りになっている Life in Tokyo : Your Guide、すごくよいものだと思っているので、町田市さんと一緒に、住民の窓口に登録しに来たときには、そういったも

のを必ずお渡ししているというようなこともやっていますし、学習サイト「つながひろ²」と
かも御紹介したり、できる限りのことはいっぱいやっています。

その上で、今年度からは学習の機会をもう少し増やそうということで、生活上におけるル
ールやマナーの講座というところを親子向け講座みたいな、要は小学校とかに入るときに、
多分、結構、生活がガラッと変わってやらないといけないこと、個人面談とかも多分小学校
になるとあると思いますけど、そういったものもあったりもするので、そういった講座をや
ろうかな、みたいなことは、考えてはいます。

ただ、やはりできていることが、日本語教育をする、知ってもら、分かってもらうとい
う、どうしても一方向になりがちですし、多分このポータルも一緒ですけど、やる気がある
人はやってくれるのですよね。問題は、やる気がない人というか、そんなに必要性を感じて
いない、先ほど言ったコミュニティの中でもう閉じてしまっていて、周りとしゃべれるから、
自分がそこまでしゃべれなくてもいいよねというようなところ、これは本当にジレンマで、
こちらが提供すればするほどそうになっていくというケースもあるのです。

今、小学校で面談のときに通訳さんを用意しますが、結局用意してもらえからしゃべ
れなくなっているのですよね、みたいな、ここを本当に何か、どうせめぎ合うかなというの
はあって、提供したいなと思う一方、そこにやはり自発的な何かを持ってもらえるとありが
たいのですが、やればやるほど、言い方は悪いのですが、甘えられてしまうという側面も
あって、これすごい悩ましいなと思っています。

なので、まさに委員としてきていらっしゃるような、自分でやってこられた方のマインド
ってどこにあったんだろうみたいなものって、やはりすごく気になっていて、必要に迫られ
ればやるではないですか、人間って。その辺りの何か必要に迫られ感みたいなのが、先ほ
どの義務と権利、義務にしてしまうというのが怖いなという一方で、ただ、それも一つのエ
ンジンになるしなと思ったので、冒頭に言いたいいろいろな思いが混ざっていますというの
もまさにそうなのですが、何が正解か分からないなと思うのですが、試し試し、いろ
いろな施策をやっていく中で当たったものを共有させていただいて、それいいねって一つ
ずつやっていくしかないのかなというような思いもあって、難しいなというふうに思っ
ています。

○神吉座長 ありがとうございます。

² 文部科学省「「生活者としての外国人」のための日本語学習サイト つながるひろがる にほんごでのくらし」

チョウチョウソー委員。

○チョウチョウソー委員 チョウチョウソーです。僕が最近来たミャンマーの人たちにできるだけ発信しているのは、日本に住むならば、日本人たちが気になっているのは、ごみ、音、臭い、その三つをきちんとやれば、まず自分が住んでいる周りに問題がほとんどない。それをビルマ語で発音すると、同じ発音、初めは、ごみはビルマ語でアマイク（အမှီကံ）って言う。アーで始まる。音ならアーッタン（အထံ）とアーで始まる。臭いはアナン（အနံ့）という。だから三つのアーをきちんとやれば、日本で取りあえず生活するのに周りの問題がないのだよ。そういうことを僕はできるだけ伝えているので、だから例えば、東京都でも訓練を、ごみを何曜日、何曜日に、それだけではなくて、なぜこういうことが必要かという。僕ら例えばビルマ、ミャンマーでは、ごみを分別する習慣がない。もう全部一気にみんな捨てるから。日本でなぜこういうことを、できるだけ僕ら外国人たちに、なぜこういうことをやっているのか理由、そういうことの影響がどうなるかということを伝えたら、教えたが一番いいと思いますよ。

以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。いろいろな文化、社会背景があるので、どういう前提でそれを捉えていらっしゃるかというのがやはり違うわけですね。我々がこう伝えようとしているものが、そのとおりに伝わっているかどうかみたいなことも含めて。そういう意味では今日何度か出ているエスニックコミュニティの協力というのを得ながらやっていくというのはすごく重要だなと思います。

長谷部委員、お願いします。

○長谷部委員 まさに今言おうと思っていたことなのです。先ほど言われたことなのですが、北区の佐藤委員のおっしゃることはものすごくよく分かり、行政の方々が多分大変苦労しているのだということは、本当にそうですよねってとてもよく分かったのです。多分、行政の方の不満を受け止める組織というのも多分必要で、そうですよねというふうに。

正直に言ってしまうと、その問題もう 30 年日本で起きていることなので、逆に言うと、そうか、それだけ自治体間のネットワークってないのだなというのが逆にびっくりで、多分もう 30 年前から静岡ではブラジル人がうるさいと言われてきて、神奈川県もそうですよね。カンボジア人がいるとかってことはもうみんな経験してきているよねって思うと、その情報が全国には回ってないのだなというのは改めて思うのです。そういう意味では北区の方々は多分今が新しくどんどん人が来ているということがあるかと思うので、ぜひ頑張

ってチョウチョウソーさんか、シュレスタさんを北区で見つけていただき、多分その方々にうるさいって言われているところに行って注意していただくとか、説明していただくとか、あるいは、思い切って北区にいる、どの国の方が今一番多いのか分からないですけど、多分中国の方なり、ベトナムの方なりの人たちのための区の説明会みたいなのを思い切ってもう開いてしまう、公民館とかで。みたいなことをやって、区の人とエスニックコミュニティのトップの人が2枚看板で出て行って、こうしてください、ごみはこうしてくださいみたいなことを1回どこかで。日本人が言っているということになってしまうと、エスニックコミュニティの人にも聞かないと思うけど、エスニックコミュニティの偉い人が出てくれば、そうかそうかって説明も多分してくれると思うので、感情渦巻く中で、感情をコントロールしながらだったら多分、行政の人とエスニックコミュニティの人とか両方。エスニックコミュニティの人に、行政の人のことについて、分かる分かるそうだよねって言う人が発見できれば、第一歩だと思うので、何かそういう方を見つけていただくといいのではないかと思います。

そこまですれば多分行政側ももうやっていますよと、ほかの区民の方に言えるようになると思うので、何かそういう割と簡単なことで何とか、簡単ではないのか。ごめんなさい。あとはごみステーションに何か各国語で貼っていくとか、でもそれはなかなかできないか。やはり人、全部人を介さないと難しいかもしれないので、そういう何か北区にシュレスタさんとチョウチョウソーさんを見つけてくださいというところでしょうか。

○神吉座長 ありがとうございます。恐らく日本で生まれ育った人は、何となくごみをその辺に捨てること自体にちょっと罪悪感を持つ人が多いと思います。平気では多分捨てられないと思うのです。そうではない社会文化で育っている方もいらっしゃるの、恐らくその辺の感覚がかなり違うのだらうなというのはあって、そうするとやはり先ほどチョウチョウソー委員がおっしゃったように、なぜこれをやっているのか、みたいなところを丁寧に理解していただく。生まれ育ちの方々の理解できるような方法でやるというのはすごく重要だらうなと。

ただ、それを全ての、今180か国ぐらいいらっしゃるのでしたっけ、東京都は。180種類やるかみたいな話になってくるので、それはいろいろ検討の余地はあると思いますけれども、でも、少なくとも日本人住民が引っ越してきたときに、ここのごみの捨て方はこうですよってお伝えする伝え方とは違う何かがないと解決しないのだらうなというのは感じているところはあります。

ほかにはいかがでしょう。シュレスタ委員、お願いします。

○シュレスタ委員 シュレスタです。先ほどからの三つのポイントで、入り口のところはもちろん周知させるのが一番大事だということは思います。先ほど町田市ですね。やはりその本人たちとつながる人たちを通してやらないと、これはちょっと難しいかなというふうに思います。例えば保健師とかですね。学校の先生とか。毎回どこにつながっても日本語勉強していますかとか、こういうことありますけど大丈夫ですかみたいな、市役所とかもそうだと思います。

継続のところは、やはりそれをやってから何があるのかということですね。例えば日本人とのつながりの機会をすこし増やしていくとか。そういうこと。あと一番私が思うには、親世代は自分から勉強しようという人は少ない、もちろん、やる気がある人は自分で探していつて、やっているのですけれども、でも必要があっても何とかなる、そのときは何とかなるって思っている人が圧倒的に多いのですね。その人たちには、やはりどこかで押しつけないと勉強してくれないと思うので、義務というのはそういうものだと思うのですよ。強制するというのも言葉的に語弊があるかもしれないですけど、でもある程度そういう環境をつくらないと勉強してくれない。やはり日本語の勉強、マナーを勉強しないから、いろいろな問題が起きていると。ごみの問題とか、部屋の問題とか、いろいろ起きているというふうには思います。

ですので、そこは一つの方法としては、やはり学校に行っている子供たちですね。日本の学校に行っている子供たちを通して、自分の親には日本語を勉強してもらおうという何か仕組みとかですね。そういうのを非公式にですね。インフォーマルにそういう子供たちから言ってもらおう。日本語をなぜ勉強しないの、お父さんとかお母さんとかに言ってもらったほうが聞いてくれるかもしれないという感じはします。

あとはですね。北区の佐藤委員がおっしゃったことは、全く同じことが最近、私が住んでいるところでも起こっています。私は小金井市ですけれども、同じ住宅に今大体 60 ぐらいのネパール人の家庭が住んでいるという話を聞いていて、これからもっと増えていくと。そこに最近私のところに、市の方、あと警察の方から問合せが来て、同じような問題ですね。公園でネパール人だけの子供たちが遊んでいる。そこに日本人の子供たちとかは、入りにくい。あと、その公園で遅くまで話しているから、散歩する人たちも、知らないから怖いと思うのですよね。だから、そういうところには、私が思うには、その交流の機会をもうすこし増やしたほうがいいではないかと。本当にビル単位でとかですね。フラット単位でとかです

ね。1階の部分は今日お会いしましょうみたいな、そういう形で何か仕組みはできるのではないかなと思うのですね。

もちろんそういうところには、今度私が、私の知り合いも何人か住んでいるので、まず知り合いたちを集めて、こういうことがありますけどすこし気をつけましょうという話をしようと思っているのですね。だから、やはりあとは、もうすこし制度的なことかもしれないですけども、その地域、その市のコミュニティのリソースパーソンみたいな人ですね。この人は市のリソースパーソンだからこの人が言ったことを聞かないと危ないよ、という認識をさせるのも一つ。危ないというちょっと言葉は不適切かもしれないですけども、聞いたほうがいいよというような認識をさせるのも必要と思うので、市とか区からもそういうことをできるような人たちに、何か募集するというわけではないのですけども、名前だけで肩書が可能かどうか分からないですけど、〇〇さんはこのリソースパーソンです。何かあったときに彼を通してやってくださいというような形でも一つはいいのではないかなと思います。

ちなみに北区には私の友人がいて、彼が、何かあるときに、区役所で手伝っていますと言っていましたので、もしよろしかったら一緒に何か話できますので、ぜひ御活用していただければと思います。

以上です。ありがとうございます。すみません、長くなりました。

○神吉座長 ありがとうございます。

ほかに。阿久津委員、お願いします。

○阿久津委員 One Terrace 阿久津でございます。すみません、何かいろいろ頻繁に発言して恐縮なのですが、ほかの皆さんの意見というのもあるのですが。

この日本語学習という観点から、地域社会との接続という目的の一つは、課題サイドで言うところのアンダーグラウンド化しないような仕組みというところの構築というのがあると思うのですけれども、一緒に住民と考えたときに、自国文化のいわゆるアイデンティティを持ちつつも、その方一人一人が日本で生活をする自分のアイデンティティを持っていただくという、そこへの接続という意味で、地域コミュニティへの参画といったところが非常に重要かなと思っています。

ただ、日本人同士もなかなか地域コミュニティに参加していない今の現状、特に東京都などは特に顕著だと思いますけれども、一部の方たちはしっかりつながっているのですが、なかなか交流がない、そういったような現状もあるかなというところで、結構難しい問題かと

思っております。

その中で特に日本語学習をされた外国籍の方が地域社会への接続をするといったときには、学んだ日本語を使って何か地域への貢献であるとか、社会参画ができたという経験を持っていただくということが重要なと思っておりますので、例えばこれはアイデアですけども、通訳、翻訳が専門ではないけれども、そういった方たちに同行するような経験をしたり、それから例えば学校の入学式のところで、支援者という形で入っていただくであるとか、もしくはそういった学習者の方が、A1とかの本当に初心者の学習者に対しての教師役として参加していただくとかという形で、何かしらの意図的な社会参画の仕組みといったところを設計していくといったところが、ひいてはこういった地域社会で、活躍ができる外国籍の方がロールモデルになっていく、そういったところを意図的につくっていくことができるかなと考えております。

二つ目が、この資料には、外国人材向けの就労、キャリア支援の機能というようなアイデアも書かれており、これは恐らく今回のターゲットとなる方というのが、日本語のA1、A2レベルの方といったところを想定してお話かなというふうに思っておるのですけれども、ここはターゲットによって、どういった支援が必要なのかといったところが出てくるかなと思っております。特に、これは学校であるとか、企業側の役割というのが大きいかと思います。

私どもはそういった人材の紹介もやっている会社ではありますけれども、一般の面接対策等というよりは、重点的にやっているのが、日本の商習慣をまず理解していただくことを面接対策以上に時間をかけたりですとか、あとはその企業のことを理解する時間ですね。例えば〇〇職というのを比較して、給料が高い低いだけで比較している方たちから、どう、その地域が魅力的なのか、生活がしやすいのか、そういったところを理解していただくという時間を取ったり、そういったこともしております。これはターゲットがどこなのかにもよるのですけれども、そういったところを、行政もそうなのですから、企業、学校とも連携をしながら仕組みがつけれるといいのかなと思っております。

以上です。

○神吉座長　ありがとうございます。

亀井委員、お願いします。

○亀井委員　地域社会との接続ということで、最後の議題だと思って、そこですこしお話ししたいと思うのですけれども。我々国際交流センターと名乗っていますけれども、各自治体

ごとに国際交流協会とかというのがありまして、そこで我々もそうですけれども、地域の人たちと外国人の方々、それから日本人の方々の交流会とかいうのを開いたりしているんですね。そういうのをここで告知していただくのもいいと思いますし、そういうのを開いてみると、一番トラブルになる元としては、やはり誤解があると思うので、実際に会ってみると、そうでもないのだなということが分かるということもあるので、そういうのを信じて交流会をずっと続けているのです。ただ一方ですね。国際交流センター、私どもの反省としては、結局そういう交流会に出てくる人というのは、交流したい人なのですよね。日本人もそうだし、外国人の人も交流したい人しか出てこなくて、実際本当にみんな交流したいのかというのは、いつも、前にもお話ししたかもしれませんが、私、別にそんなに交流したいと思うほうでもないの、放っておいてくれと思うほうなのかもしれませんが、交流したいという人しか出てこないの、そういう人は、もしかしたらいいのかもしれないけれども。そういう意味で高齢者の方ですとか、そういうところに接続しにくい人たちとか、本当に自分たちのコミュニティの中にいる人たちという人たちに、そこまで届けるということを考えたときには、やはり交流協会というところではなくて、例えば今の地域の話もありますけど、町会とか自治会とかですね。そういうのって東京では弱まっている言われていますけども、お祭りをやっていたりとか、盆踊りをやっていたりとかするとかところが結構あるので、そういうところに接続するという機能が、やはりポータルから接続するという機能が必要だと思うのですよね。

つながり創生財団は、町会自治会の共助の機能も持っていらっしゃるわけなので、何か東京都として動けることがないのかなとすこし思います。

あと社会福祉協議会とか、民生委員とかですね。しっかりと組織化されている、自治体ごとに組織体制が整備されているところが最後のセーフティーネットだと思うので、そういうところに十分に目が届いていないといけないと思うし、ポータルから接続できないといけないかなとすこし思いました。

あとすみません、時間も少ないのですが、ファンクションの例として挙がっていますが、例えばワイルドアイデアですがポータルの中で、外国人の方主体、あるいは外国人と交流したいという人たち、そういう方々が自主的なサークル活動ができるみたいですね。例えば通訳の話みたいに、通訳ボランティアやりたいというサークルでもいいと思いますし、あるいはスポーツとかも分かりやすいと思うのですよね。ネイティブの人たちだけでスポーツやりたいという人もいるだろうし、日本人と交流したいというからスポーツ

やったという人もいると思うので、そういう人たちがバーチャルの中で、サークルをつくれるというような機能があってもいいのかなと思います。

以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。長谷部委員、1分をお願いします。

○長谷部委員 頑張ります。今の亀井委員の基本的に御発言に大賛成ということがベースにあるのですが、一ついいのではないかと思うのは防災訓練で、多分日本語ができる移民第二世代の子とか、あるいは第一世代でもシュレスタ委員みたいな方々に、逆にお年寄りが多いところで、AEDを使ってみたりとかですね。あと放水とかやってみたりとか、あと車椅子を押す体験をしてもらうみたいな。目に見えるところで、それこそ外国のルーツの人たちが日本の社会に貢献できるのだというのは、多分防災が一番目に見えやすいと思うので、そういうところを活用したほうがいいのではないかなというのが1点。

それから、民生委員は私もとても正しいと思っていて、民生委員が最後のセーフティーネットなので、民生委員の人たちに「一緒に多文化のことを考えてもらいましょう研修」みたいなって、多分区で動員しやすいと思うので。日本人の民生委員の人から取っかかりをつかっていって、仲よくなってもらう機会をつくるというのはもしかすると区でもできる仕事ではないかなと思ったので、そこに一緒に例えばシュレスタさんに来てもらうとか、富田さんに来ていただくとかということをやって、会ってみたらいい人だったんだということの経験を、民生委員辺りの方々、自治会の方に持っていただくというのがあるのではないかなというのが1点。

最後にもう1個。スポーツが、一番言葉がなくても触れ合えるもので、多分ネパールの人もミャンマーの人もサッカーとか大好きですね。サッカーチーム多分それぞれの国であると思うので、スポーツ推進員。地域をいかに巻き込むかということは、もう既存のつながりを使うというのが一番ではないかな。スポーツ推進員の方たち、あいつベトナム人だけど一緒にやっているぜみたいな人たちがたくさんいます。

以上です。

○神吉座長 ありがとうございます。2分半ぐらい。

○長谷部委員 ごめんなさい。

○神吉座長 お時間来ましたのでそろそろですけど、墨田区に「アボット・カマイ」というフィリピンコミュニティの皆さんのボランティア団体があって、この方々は自分たちが日本に来てお世話になったので、それを何らかの形でお返ししたいということで、いろいろな

ところの英語通訳をやったり、ボランティア活動をやったりしている人たちがいるのですね。そういう事例も含めて、その外国ルーツの皆さんが最終的にこのコミュニティとか社会で責任を持って御自身たちで、自分たちも含めて何かこの地域を一緒によくしていきたいよねって考えていただかないと、なかなか共生というのは難しいと思いますので、そういったところにつながるような仕組みというのがつくれるといいのだろうなと思って伺っていました。

話題も課題也多岐にわたり、これは非常に難しい取組だと思いますけれども、東京都がこれを進めていくということがいろいろな形で全国に広がる影響にもなると思いますので、ぜひ引き続きよろしく願いいたします。

それでは、事務局に最後お戻しいたします。

○事務局 では皆様、本日は活発に御議論いただきまして、それぞれの立場で貴重な御意見を頂戴することができたかなと思っております。誠にありがとうございました。

本日の会議の資料及び議事録につきましては、東京都のホームページのほうで公開をいたします。資料については一両日中に掲載いたしますが、議事録については少々お時間をいただく予定でございます。

それでは、以上をもちまして、令和8年度第1回地域日本語教育とうきょう推進会議を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

午後0時02分閉会